

# 子どもの発達特性に応じた体験活動の実践 ～「コミュニケーション能力」と「リーダーシップ」に着目した検討～

林 幸 克

(文教大学付属教育研究所客員研究員)

## A Study on the Practice of Experience-Activity according to the Development of Children : Focusing on "Communication Skill" and "Leadership"

HAYASHI YUKIYOSHI

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

### 要 旨

子どもの発達特性に応じた体験活動をより効果的に実践する在り方を、「コミュニケーション能力」と「リーダーシップ」の2つの観点から検討した。前者は、学校進行に伴いその向上の度合いが縮小傾向にあり、年齢が早いうちに対人関係スキルを磨く場面を多く設ける必要があることが明らかになった。後者は、学校進行と共に向上度が拡大傾向にあり、年齢が進んでから指導性を活かせる状況を提供することが効果的であることがわかった。

### 目 的

2001(平成13)年に学校教育法・社会教育法が一部改正され、青少年に対してボランティア活動などの社会奉仕体験活動や自然体験活動などの体験活動の充実が謳われたことは周知の通りである。それ以来、体験活動<sup>1)</sup>の重要性が改めて認識されるようになり、教育現場の様々な場面において取り組まれ、その活動は質・量ともに拡大の様相を呈している。社会教育では、公民館や博物館、それに類する社会教育施設などが中心となって体験活動を推進している。また、社会福祉協議会やボランティアセンター、NPO、民間教育産業なども活動を展開している。学校教育に目を移せば、特別活動や総合的な学習の時間を基軸に体験活動が積極的に行われている。

そこでの体験活動の実践をより効果的に進めるためには、子どもの心身の発達特性を考

慮した活動展開を計画することが重要である。本研究では、子どもの“発達”を、学校という視点から“学校段階”として捉え、子どもが小学生、中学生、高校生、それ以降と成長するに伴って変化を見せる能力や態度を取り上げて、比較検討する<sup>2)</sup>。

その際、比較検討する指標として、特別活動に着目する。『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』<sup>3)</sup>において、特別活動を通して涵養することが期待される事項が大きく7つ挙げられており、それらはハヴィガーストの示した発達課題<sup>4)</sup>と類似している部分が多いと思われる。その中でも特に、(1)好ましい人間関係を形成するために必要な能力や態度、(2)自己を生かす能力や態度の2点を取り上げ、子どもの発達に応じた活動展開の在り方を考察する。本研究では、前者をコミュニケーション能力<sup>5)</sup>、後者をリーダーシップ<sup>6)</sup>に相当する

## ・自由研究

概念として捉え、論を展開する。

## ・方法

国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、2000（平成12）年5月から10月にかけて実施した調査結果に基づいて、改めて分析を行う<sup>1</sup>。

調査研究の概略としては、下記に示す研修会等の参加者を対象に記名式質問紙調査を行い、研修会等の前（事前調査）と後（事後調査、あるいは事後1ヵ月後調査）の2回ないしは3回、同一項目について自己評価してもらい、その変化を測定している。いずれも5件法で回答を求め、データ入力に関して、「きわめてあてはまる」を4点、「かなりあてはまる」を3点、「わりとあてはまる」を2点、「少しあてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点として得点化している。

### <分析対象事業>

#### A 少年版野外体験事業（児童生徒チェック）

調査対象：小中学生441人

#### B 少年版野外体験事業（保護者チェック）

調査対象：小中学生の保護者440人

#### C ボランティア研修会

調査対象：高校生716人

#### D 教職志望学生対象研修会

調査対象：大学生106人

なお、個々の調査結果の項目別の度数・平均値、因子分析結果等の詳細は、参考文献を参照されたい。

## ・結果及び考察

### 1. 特別活動に期待されること

『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』によると、「生徒会活動や学校行事をめぐる活動などホームルームや学年の枠を超えた異学年・異年齢の集団による活動である点」が、特別活動の大きな特色の一つとして挙げられている。そうした特色のある特別活動は、一人一人の生徒が様々な集団に所属して活動

することによって、生徒の人間関係が多様に広がり、それに伴い、社会経験や生活経験も豊富になるなど、教科や道徳などの教育内容とは異なる意義が認められている。そして、そこでの活動を通して、次の7つの能力・態度を育むことが期待されている。

望ましい人間関係を形成するために必要な能力や態度

所属する集団の充実向上に努めようとする態度

社会の一員としての自覚を深めること

社会生活上のルールを尊重すること

自己の役割を果たそうとする態度

人間としての在り方生き方を探求すること

自己を生かす能力や態度

以下では、そうした能力・態度が、子どもの発達段階によって、どのような変容をみせるのかを検討する。

### 2. 青少年教育施設における実践の検討

子どもの発達に応じた体験活動の実践を検討するにあたり、“発達”を“学校段階”として読み換え、児童生徒等が年齢（学校種）の進行に伴い、上記～についていかなる変化を遂げているのかを手がかりに考察する。

#### ① 年齢（学校種）段階別の変化

##### - 因子レベルの検討 -

#### A 少年版野外体験事業（児童生徒チェック）

事後直後では、「対人関係スキル」（0.45点増加）、「自然への感性」（0.28点増加）、「自己成長性」（0.24点増加）、「自己判断力」（0.20点増加）、「リーダーシップ」（0.16点）の順に有意な向上が見られた。事後1ヵ月後については、「自然への感性」は効果が減少し、「リーダーシップ」は逆に増加している。

「対人関係スキル」は、円滑な対人関係を形成する自信につながるものであるが、事後直後の向上が0.45点増加で最も大きく、その

表1 少年版野外体験事業前後の変容（児童生徒チェック）

（4点満点）

7指標 の番号		事前調査（310人）		事後直後調査（310人）		事後1ヵ月後調査（310人）		事後直後 - 事前		事後1ヶ月後 - 事前	
		平均値（標準偏差）	平均値（標準偏差）	平均値（標準偏差）	平均値（標準偏差）	平均値の増加分	t値	平均値の増加分	t値		
-	自然への感性	2.75（0.92）	3.03（0.90）	2.94（0.92）	2.94（0.92）	0.28	6.25***	0.18	4.09***		
4	自己判断力	2.55（0.77）	2.75（0.79）	2.74（0.79）	2.74（0.79）	0.20	5.53***	0.19	4.85***		
	リーダーシップ	1.74（1.19）	1.91（1.12）	2.02（1.12）	2.02（1.12）	0.16	3.31***	0.28	5.23***		
	対人関係スキル	2.51（1.08）	2.96（0.98）	2.94（0.95）	2.94（0.95）	0.45	9.43***	0.43	9.17***		
3	自己成長性	2.36（0.90）	2.59（0.89）	2.63（0.87）	2.63（0.87）	0.24	5.57***	0.28	6.38***		

\*\*\*p < .001

効果は1ヵ月後も持続している。キャンプの最初のプログラムには、ほとんどの施設で仲間づくりゲームなど、楽しい雰囲気の中で、参加者同士が触れ合うことができるような活動が取り入れられている。このような配慮や、テント生活、仲間と協力しながら行う各種活動を通じて、対人関係を形成する自信を得たと考えることができる。

「自然への感性」は、事後直後に、0.28点の向上が見られたが、事後1ヵ月後には0.18点増加と効果が小さくなっている。キャンプの実施される環境は、日常生活において触れるよりも豊かな自然の中で行われるため、普段見ることのできない自然の美しさに子どもが触れ、自然の素晴らしさを実感したものと思われる。しかし、そのような感動は、1ヵ月後にはやや薄れる傾向にあるようである。

「自己成長性」は、忍耐力や向上心、我慢強く物事に取り組む姿勢を表すが、事後直後に有意な向上が見られ、事後1ヵ月後も効果は持続している。キャンプ中は、テレビやゲームなどの遊び道具や日常使っている便利な道具はほとんど使うことができないため、普段なら簡単にできることを我慢したり、創意工夫して物事に取り組まなければならない状況に置かれる。そのような状況下でも、キャンプ生活を送ることができたということが子どもの自信となり、向上したものと思われる。また、活動についても、ハイキングや登山、カヌーなど、体力的にも、精神的にも厳しい

プログラムを取り入れた施設が多く見られたが、厳しい活動を最後までやり遂げることができたという達成感も、「自己成長性」を向上させた要因の一つと考えることができる。

「自己判断力」は、自己を管理し物事を判断する力を表すが、事後直後は0.20点の増加、事後1ヵ月後は0.19点の増加と、ある程度の向上が見られた。主として、衣服や時間の管理・判断に関する内容の項目であるが、これらを子どもに判断させ、自分の責任のもとでの行動を促すというねらいを明確にしたプログラムを展開すれば、さらに向上が期待できるものと思われる。

「リーダーシップ」は、事後直後の向上は、0.16点と小さいが、事後1ヵ月後では、0.28点の増加とやや大きくなった。このことは、キャンプ終了後の1ヶ月間の新たな体験の影響も考慮する必要があるが、キャンプで得たリーダーシップを発揮する行動が、1ヶ月間の様々な場面で表出し、自信を得たと考えることができる。また、事前の平均値をみると、1.74点で最も低いレベルにある。この結果を勘案すると、子どもは、学校などで集団生活を送っているが、みんなをまとめるというリーダーシップ行動をとるチャンスが少ないのではないかと思われる。キャンプ生活では、野外調理などの班別プログラムで、グループ内の役割分担や手順を決めるなど、子どもにリーダーシップ行動を求める場面が多々あった。日頃、リーダーシップを取るチャンスの少な

・自由研究

い子どもに、キャンプを通じてそのような機会を提供するのは、非常に有意義で、少なからぬ効果が期待できるといえる。

**B 少年版野外体験事業（保護者チェック）**

保護者チェックでは、すべての項目で事後直後の向上よりも、事後1ヵ月後の向上の方が大きかった。これは、保護者が子どもに様々な効果が表れることを実感するのに、ある程度の期間が必要であることを意味するものと考えられる。このことを勘案すると、事後調査を実施する時期として、保護者チェックは、キャンプ直後に実施するより、1ヵ月後に実施の方がより適切ではないかと思われる。ここでは、子どもと保護者の比較を中心に検討する。

「対人関係スキル」は、事後直後に0.23点の増加、事後1ヵ月後に0.32点の増加が見られた。子どもの場合も、事後直後に0.45点の増加があり、最も大きな向上で、保護者の認識も同様である。

「自己成長性」は、事後直後に0.19点の増加、事後1ヵ月後に0.31点の増加が見られた。子どもは、事後直後が0.24点、事後1ヵ月後が0.28点で、ともに事後1ヵ月後の向上が大きかったが、その向上の度合いは保護者の方が大きい。

「リーダーシップ」は、事後直後に0.18点の増加、事後1ヵ月後に0.32点の増加が見られ

た。子どもについても、事後1ヵ月後調査の方により大きな向上があり、保護者とほぼ同様の傾向を示している。つまり、親の認識と子どもの認識共に事後直後から事後1ヵ月後にかけての向上の仕方が大きいといえる。

「自己判断力」は、事後直後に0.17点の増加、事後1ヵ月後に0.27点の増加が見られた。子どもでは、事後直後が0.20点の増加、事後1ヵ月後が0.19点増加と、事後直後、事後1ヵ月後とも、ほぼ同様の増加を示しているのに対し、保護者では、事後1ヵ月後の方がより効果が大きくなっている。

「自然への感性」は、事後直後に0.15点の増加、事後1ヵ月後に0.19点の増加で、直後、1ヵ月後とも向上が最も小さい。子どもについては、事後直後（0.28点増）の向上はある程度大きいですが、1ヵ月後にはやや小さくなっている。直後は効果があってもその後、効果が持続しにくいというため、保護者が子どもに生じ得る変化に気づきにくい内容であるのではないかとと思われる。

**C ．ボランティア研修会**

「ボランティアの多様性の理解」（0.59点増加）、「自己実現への意識」（0.42点増加）の順に向上が大きく、「解説技能を伴う指導性」（0.37点増加）と「コミュニケーションの自信」（0.26点増加）にも同様の傾向があった。また、「国際性」（0.19点増加）に関しては、統計的

表2 少年版野外体験事業前後の変容（保護者チェック）

（4点満点）

7指標 の番号		事前調査（343人）		事後直後調査（343人）		事後1ヵ月後調査（343人）		事後直後 - 事前		事後1ヵ月後 - 事前	
		平均値（標準偏差）	平均値（標準偏差）	平均値（標準偏差）	平均値（標準偏差）	平均値の増加分	t値	平均値の増加分	t値		
-	自然への感性	2.62 (0.81)	2.77 (0.81)	2.81 (0.85)	0.15	4.31***	0.19	4.75***			
4	自己判断力	2.28 (0.67)	2.45 (0.71)	2.56 (0.73)	0.17	6.52***	0.27	8.39***			
	リーダーシップ	1.74 (1.04)	1.92 (0.96)	2.05 (1.01)	0.18	4.78***	0.32	7.50***			
	対人関係スキル	2.33 (1.02)	2.56 (0.94)	2.66 (0.90)	0.23	6.37***	0.32	8.42***			
3	自己成長性	2.04 (0.80)	2.23 (0.80)	2.34 (0.81)	0.19	5.95***	0.31	8.13***			

\*\*\*p < .001

表3 ボランティア研修会前後の変容

(4点満点)

7指標 の番号		事前調査(716人)		事後直後調査(716人)		平均値の 増加分	t値
		平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)		
	コミュニケーションの自信	2.51	(0.78)	2.76	(0.82)	0.26	13.34***
-	ボランティアの多様性の理解	1.16	(0.74)	1.75	(0.84)	0.59	25.43***
	解説技能を伴う指導性	1.46	(0.85)	1.83	(0.92)	0.37	17.38***
6	自己実現への意識	2.52	(0.81)	2.94	(0.85)	0.42	17.69***
-	国際性	2.18	(1.15)	2.37	(1.16)	0.19	6.79***

\*\*\*p<.001

には有意差が認められたものの、その変化の仕方は少なかった。

「ボランティアの多様性の理解」についてみると、事前の得点が1.16点で、かなり低かった。このことは、ボランティア活動とは社会福祉活動であるという日本社会にある伝統的な社会通念の影響のためか、多様な活動分野に対する理解が低いことを示していると思われる。それが事後では1.75点にまで上昇し、かなりの向上が見られた。ボランティア活動が求められる背景には、多くの人々が、心の豊かさや人間らしい生き方を一層求めていることがあるが、活動の多様性を理解することが、人々の活動の幅を広げ、より一層活動に参加しやすい条件を作っているものと考えられる。

「自己実現への意識」に関しては、事前で2.52点と比較的高かった。これは、この種の研修会に参加する人たちは、もともとボランティア活動に対する意識が高いためではないかと思われる。事後では2.94点と、さらに向上していることから、研修会への参加は、ボランティアとして活動することが自己実現や自己教育力の育成に繋がるという意識を高めることに有効であると考えられる。ボランティア体験は、自発的能動的な行動のできる、責任ある社会人への成長を助長するものである。青少年教育施設におけるボランティア研修会は、このような青少年の発達課題に立脚したものであり、具体的な活動イメージをさらに

広げた結果、自己実現の意識を高めることに効果をあげていると考えられる。

「解説技能を伴う指導性」では、事前で1.46点と、「ボランティアの多様性の理解」の次に得点が低かった。自分の意見を発表したり、他者を指導することは、そういった場と機会に恵まれなければ、なかなか育ちにくいものだと思う。その分、少しでもそうした意見表明や指導がうまくできれば、その自信が向上しやすいとも考えられる。そうした指導性の育成という面から、生涯学習審議会答申(1992(平成4)年)は、「ボランティアを受け入れる施設及び機関等は、必要に応じ、ボランティア活動のリーダーとなる人の資質・能力の向上を図る機会を設けることが必要である」としている。「解説技能を伴う指導性」の向上が見られたのは、このような社会的要請・期待に合致した内容のプログラムを研修会が提供している結果ではないかと思われる。

「コミュニケーションの自信」については、事前で2.51点と、かなり高い値であった。これは、初めから他者と接するという資質・能力が高く、人と関わることを好む傾向にある者が研修会に参加していたということが反映されているのではないかと思われる。そして、そのさらなる向上に、研修会はいくら役立っているようである。ボランティアとして活動を進めていく際に、様々な人々と関わり、接する場面が多く生じることは容易に想像でき、その際に必要となる「コミュニケーションの

・自由研究

自信」という基礎的な能力が向上したことは意義があるといえる。

「国際性」は、異国の文化に関心を持ち、将来、国際的に活動したいという2項目からなるものである。事前（2.18点）と比べると事後（2.37点）の方が0.19点の増加があり、統計的には有意であったが、それほど大きな向上とまではいえない。最近の青少年教育事業では、日本在住の外国人との交流を含んだプログラムもしばしば見られるようになってきた。ボランティアとして活動するためには、これらの外国人とも気軽に交流することができ、日本人参加者との橋渡しをするコーディネーターとしての能力も必要とされるのではないかと思われる。

**D．教職志望学生対象研修会**

「野外活動の技術」（0.75点増加）、「集団活動やその指導の自信」（0.61点増加）、「自然に対する理解と不測の事態への対応」（0.56点増加）の順に得点の増加が大きかった。「仲間との協力関係」（0.34点増加）にもやや向上があったが、「子どもに対する接し方」に関しては向上に有意差が認められなかった。

「野外活動の技術」では、事前の得点が1.08点で、かなり低い値を示していた。このことは、教職を志望する学生が、必ずしも野外活動体験が豊かとは限らないことを意味している。それが事後では1.83点になり、大きく

上昇している。調査協力を得た研修会は、すべて野外活動を研修プログラムに組み込んでおり、その成果が着実に表れているといっているかもしれない。今日、教職には様々な生活体験・社会体験が必要とされている。研修での体験によって未体験の部分の補っていくことは、非常に意義のあることと考えられる。

「集団活動やその指導の自信」は、事前で1.93点を示し、「野外活動の技術」よりは得点が大きかった。大学生は、研修前の段階で、集団で活動することやその集団に対する指導について、ある程度は自信を持っているようである。それが事後には2.54点となり、研修によってさらにその自信が高まっていることがわかる。特に、集団活動を指導する自信を高めていることは注目すべき点であると思われる。集団や他者に対する指導性を身に付けることは容易なことではない。それが、比較的短期間の研修によって向上を見せるようになっており、教職を目指す大学生の指導性に対する意欲を伸ばすのに効果があったと考えられる。

「自然に対する理解と不測の事態への対応」について、「野外活動の技術」の場合と同様に、事前の得点（1.32点）がやや低めであった。このことから、自然と接する機会にあまり恵まれておらず、それが、自然の中で予期せぬ出来事に臨機応変に対応する自信を持っていないということに反映されているのでは

表4 教職志望学生対象研修会前後の変容

(4点満点)

7指標 の番号		事前調査(101人)		事後直後調査(101人)		平均値の 増加分	t値
		平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)		
	集団活動やその指導の自信	1.93	(0.80)	2.54	(0.82)	0.61	10.02***
-	自然に対する理解と不測の事態への対応	1.32	(0.75)	1.88	(0.86)	0.56	7.97***
-	野外活動の技術	1.08	(0.86)	1.83	(1.00)	0.75	9.77***
	子どもに対する接し方	2.59	(0.93)	2.72	(1.01)	0.13	n.s.
2	仲間との協力関係	3.11	(0.79)	3.45	(0.74)	0.34	4.99***

\*\*\*p<.001

ないかと思われる。修学旅行や宿泊行事、遠足等で、学校の教師には従来から集団指導や自然の中での指導の機会があった。今日「総合的な学習の時間」等で、従来の枠にとられない授業展開が求められている。教職志望者が自然体験の機会を多く持ち、その指導に自信を持つことは、教育の幅を広げることに役立つものと考えられる。

「仲間との協力関係」に関して、事前の得点が3.11点でかなり高いことがわかる。それが、事後では3.45点になり、さらに高まっている。この結果から、教職を希望する大学生は、もともと「仲間との協力関係」を重視し、理解を示していると思われる。大学等での活動で仲間との協力関係の大切さを認識しているのかもしれないが、それは顔見知りの仲間との関係が多いと思われる。教職という同じ目的のもとに集まった、見ず知らずの他者との協力関係を築く機会を提供しているという点で、研修の有する役割は大きいといえる。

「子どもに対する接し方」の事前の得点は2.59点で、事前では「仲間との協力関係（3.11点）に次ぐ高い得点を示していた。事後は2.72点で、得点に有意な増加が認められなかった。研修会の中には子どもとの交流を取り入れているものもいくつかあったが、時間的には全日程のほんの一部であった。また、大学生が活動の主導権を握っているのではなく、既存の活動に参加している子どものサポートを

するという程度の交流であった。「子どもに対する接し方」の自信を高めるには、大学生が主体的に子どもと接することが可能なプログラム構成が必要であると思われる。教員研修には、この種の交流機会が期待されているのかもしれない。しかし、その反面、短期的な研修で「子どもに対する接し方」の自信を獲得するのはなかなか難しい課題であるとも考えられる。

## 2. ～ の観点からの比較検討

A～Dで共通しているのは、冒頭の と に相当するものである。そこで、年齢（学校種）の進行とともに、両者がどのように変化するのか、比較検討を試みる。

人間関係の形成に関わる能力・態度（コミュニケーション能力）の変容（表5参照）

- 1) 学校種の進行と共に向上度が縮小傾向にあることがわかる。そのため、学校段階（年齢）が早いうちに、対人関係スキルを磨く機会や、コミュニケーション能力を発揮する場面を多く設定することが望ましいものと思われる。
- 2) 小中学生の場合、事前・事後ともに、子どもの意識の方が保護者の意識より高く、認識に違いが見られる。身近で接している保護者が感じている以上に、子ども自身は対人関係スキルの向上を実感してい

表5 人間関係の形成に関わる能力・態度（コミュニケーション能力）の変容  
（4点満点）

	事前調査		事後直後調査		平均値の増加分	t値
	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)		
小中学生（対人関係スキル）	2.51	(1.08)	2.96	(0.98)	0.45	9.43***
小中学生の保護者（対人関係スキル）	2.33	(1.02)	2.56	(0.94)	0.23	6.37***
高校生（コミュニケーション能力）	2.51	(0.78)	2.76	(0.82)	0.26	13.34***
教職志望の大学生（子どもに対する接し方）	2.59	(0.93)	2.72	(1.01)	0.13	n.s.

\*\*\*p<.001

・自由研究

るのではないかと考えられる。

- 3) どの学校段階も事前ではほぼ同様の得点を示している。事後の向上の度合いに違いはあるものの、もともとの人間関係の形成に関わる能力・態度に大きな差はないようである。

自己を生かす能力・態度（リーダーシップ）の変容（表6参照）

- 1) 学校種の進行と共に向上度が拡大傾向にあることがわかる。このことから、リーダーシップや集団への指導性を生かすことができるような状況は、学校段階（年齢）が進んでから与えることがより効果的であるのではないかと考えられる。
- 2) 小中学生の場合、事前・事後とも、子どもとその保護者の意識レベルは同様である。したがって、リーダーシップに関しては、両者の認識の仕方は合致しているといえる。
- 3) 事前では大学生の得点が最も高いにも関わらず、その後の変化の仕方も最も大きくなっている。教職を志している大学生ということもあり、もともとのリーダー的資質が高かったのかもしれないが、実際に子どもを指導することで、それがさらに高まったことは注目すべきことである。

・今後の課題

1. 学校内での活動の効果

本研究では、青少年教育施設で行われた野外活動等の体験活動を通じての、子どもの変化の仕方を見てきた。見方を変えれば、学校内で行われる活動で、子どもがどのように変化するのは明らかになっていない。

ただ、本研究に即して考えるならば、青少年教育施設や社会教育施設など、職員交流や情報・ノウハウの共有も含めて、地域社会的・物的・人的資源をより有効に活用することで、学校教育において活動を展開する際にも、学習効果が向上しやすくなるのではないかと思われる。

2. 同一の体験活動による効果

野外活動やボランティア活動といった、体験活動を通しての変化を見てきたが、各学校段階の子どもが同一の活動を体験しているわけではない。つまり、体験活動という大きな括りでは同じでも、その詳細な内容は異なるのである。そこで、子どもが同じ活動をした際に、学校段階によっていかなる変化の違いが表れるのか、さらなる検討の余地がある。

表6 自己を生かす能力・態度（リーダーシップ）の変容

（4点満点）

	事前調査		事後直後調査		平均値の増加分	t値
	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)		
小中学生（対人関係スキル）	1.74	(1.19)	1.91	(1.12)	0.16	3.31***
小中学生の保護者（対人関係スキル）	1.74	(1.04)	1.92	(0.96)	0.18	4.78***
高校生（コミュニケーション能力）	1.46	(0.85)	1.83	(0.92)	0.37	17.38***
教職志望の大学生（子どもに対する接し方）	1.93	(0.80)	2.54	(0.82)	0.61	10.02***

\*\*\*p<.001

【引用文献】

- (1) 伊藤は、「青少年の人間づくりに役立つように体験を意図的に準備したり、教育的に編成したのが「体験活動」である。また、体験の学習効果に着目し、これを教育の手法として活用するのが「体験学習」である。」と定義している。(伊藤俊夫編、『豊かな体験が青少年を育てる』、(財)全日本社会教育連合会、2003、pp.7-8)
- (2) 子どもの発達に関しては、ライフサイクル論を基軸に展開したエリクソンの発達課題、それをより具体的・実践的に示したハヴィガーストの発達課題の概念は看過できない。紙幅の都合で詳細には触れることはできないが、本稿では、それらの中の児童期・青年期の発達課題を踏まえた上で考察を進める。
- (3) 文部省、『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』、東山書房、1999、pp.23-24
- (4) 中等教育の段階で、仲間集団の中で習得する必要がある発達課題に関して、次の2つが挙げられている。  
社会的相互作用をもった建設的な集団生活のなかで友だちと協調すること  
(男性として、また女性としての)社会的役割を学ぶこと  
(R.J.ハヴィガースト(荘司雅子監訳)、『人間の発達課題と教育』、玉川大学出版部、1995、pp.122-130)
- (5) 本研究では、コミュニケーション能力を次のように定義する。  
「他者に対して関心を抱き、相互の意志や考え、行動を明確に理解・確認し、伝え合う能力のことである。そのためには、相手の立場・状況に対して共感的理解を示し、好意的な感情を持つことが必要となる。」
- (6) リーダーシップには、三隅二不二が提唱

したPM理論をはじめ、HS理論、AD理論などがあるが、個人を越えた集団に対して目を向けていると同時に、集団成員にも目を向けていることが共通していることであると思われる。

(木原孝博、『学級活動の理論』、教育開発研究所、1996、pp.157-163)

- (7) 国立オリンピック記念青少年総合センター、『事業効果測定のための調査票とその利用 - 主催事業評価の一方法としての参加者の変容測定方法の開発に関する調査研究報告書 - 』、2001、pp.39-69  
上記報告書では、大きく4つの調査研究が行われ、その結果が報告されている。そこでは、各々の報告が独立した形で扱われている。ただ、それぞれの調査票の質問項目をよくみると共通した項目・類似した項目が散見される。それらの項目を丁寧に取り上げていけば、発達段階に応じた縦断的な比較検討の可能性が見出せるのではないかと考える。
- (8) 前掲(3)

【参考文献】

国立オリンピック記念青少年総合センター、『事業効果測定のための調査票とその利用 - 主催事業評価の一方法としての参加者の変容測定方法の開発に関する調査研究報告書 - 』、2001、pp.39-69  
林幸克・谷井淳一、「子どもと交流できる野外活動を取り入れた教員養成研修プログラム」、『授業づくりネットワーク』1、学事出版、2001、pp.52-54  
林幸克・谷井淳一、「青少年教育施設におけるボランティア研修会の効果に関する検討」、『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』1、2001、pp.9-19  
林幸克・谷井淳一、「青少年のボランティア意識の構造に関する研究 - ボランティア

自由研究

「研修の今後の方向性についての検討 - 」,  
『日本生涯教育学会論集』22, 2001,  
pp.145-155

谷井淳一・藤原恵美, 「小・中学生用自然体験効果測定尺度の開発」, 『野外教育研究』5-1, 2001, pp.39-47

林幸克・谷井淳一, 「青少年教育施設における教職志望学生対象研修会の現状と課題」, 『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』2, 2002, pp.31-39

【付記】

本稿は, 2002 (平成14) 年に開催された日本特別活動学会第11回大会 (於: 東京農業大学) の課題研究において発表したものに加筆・修正を加えたものである。